

模擬患者を活用した高齢者看護学演習に関する文献検討

A review of the literature on gerontological nursing practice using simulated patients

佐野 望 中原 順子 野田 陽子 北川 公子
Nozomi Sano Junko Nakahara Yoko Noda Kimiko Kitagawa

キーワード： 模擬患者、高齢者看護学、演習、看護学教育、文献検討

key words: simulated patient, gerontological nursing, practice, nursing education, literature review

要 旨

高齢者看護学における模擬患者または訓練を受けていない演者（準模擬患者とする）を活用した演習の効果について10件の文献を検討した。結果、両演者の演習の共通点は、リアリティのある演習ができる、高齢者の現実の姿に適合するコミュニケーション技術を獲得するための教育方法になることがわかった。さらに、模擬患者の演習では、症状の表現が難しい認知症事例や、障害をもち生活の不安を抱えた患者を社会背景も含めて演じる事例、継続した患者の過程を再現できる一連の看護過程演習の実施が可能である。加えて、認知症高齢者の世界に寄り添おうとする姿勢を育み、対象を理解する力と個別の援助の工夫と実施ができる効果が得られる。一方準模擬患者の演習は、演者の実年齢が高齢期であれば、自身の体験談を語ることで、身体的機能低下や「死の受容」の発達課題など高齢者の特徴とその人の生き方による個人差があることへの理解が深まる。および大勢の演者を準備することが可能であり、その場合は全学生のロールプレイが実施できる。

はじめに

看護は実践的な専門領域であるがゆえに、基礎教育における臨床実習は看護学教育の全課程の中で必要不可欠である。しかしこの臨床実習では、患者の安全と安楽を優先するため、知識や技術の未熟な看護学生が患者の安全を守りながら学習主体の看護を提供することは難しい。そこで、臨床実習前に、学内でのシミュレーション学習が実習へ向かう積み上げ学習の一段階を担い、様々な方法で展開されている。看護学教育におけるシミュレーション学習の方法は、記述された患者の事例から学習する記述シミュレーション、他者の役割を演じるロールプレイ、ロールプレイを録画したビデオシミュレーション、人体モデルを活用した人体シミュレーション、患者を演じる模擬患者等

がある¹⁾。

我が国の近年のシミュレーション学習の傾向では、模擬患者を活用した演習が工夫されている。模擬患者は、1975年に日本に紹介された後、医学教育では総合的な臨床能力の評価のための客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination：以下OSCEとする）として広まっている²⁾。本田³⁾は、看護学教育での模擬患者活用の状況について文献検討を行い、1999年をはじめとして2006年までに29件の実践報告があることを示した。その中で、模擬患者が作り出すリアリティや、日常とは異なる学習環境、模擬という状況によって生じる効果などを明らかにする一方、模擬患者の定義である「訓練をうけた健康人」を活用した教育方法に焦点を絞って結果を分析することができていないことを研究の限界とし、訓

受付日：2013年10月25日

受理日：2014年1月16日

共立女子大学 看護学部 高齢者看護学

練の有無を含め模擬患者の背景別に丁寧な分析を進めることを課題として提言した。

高齢者看護学においてもシミュレーション学習は様々な方法で活用されている。それは、看護学生の祖父母との同居率の低下や交流体験の減少に加え、先入観などにより高齢者の正確な理解に困難を伴うため、実際に近い状況下における教育技法が有用である⁴⁾ことが理由である。高齢者看護学で導入されているシミュレーションの内容は、高齢者疑似体験、シミュレーションゲーム、紙おむつへの排尿体験、ロールプレイ、高齢者との対話等である。2003年の小川⁴⁾の高齢者看護学におけるシミュレーションに関する教育研究の分析によると、1999年までは他の様々なシミュレーション内容の研究であり、模擬患者を活用した演習による教育効果を調査した研究の発表は2000年以降であることがわかった。

今後、シミュレーション教育の重要性が増す中で、後発の模擬患者による演習においても、模擬患者の背景や演習内容、およびその適合性等について検討を加えることで、より効果的な演習プログラムの開発が期待される。そこで本報告では、模擬患者の背景や内容の違いによる演習の効果の特徴を文献より検討し、高齢者看護学における模擬患者を活用した演習の効果的なプログラムへの資料としたい。

I. 方法

1. 用語の操作的定義

1) シミュレーション

Tornyay, R. ら¹⁾が定義した「現実の物事または過程の構造ないし力動を実際に再現するもの(モデル)であって、参加者がそれを用いて実際に体験するのと同じように人や物にかかわり、これまで学んできた知識を応用して問題ないし状況に対して反応(意思決定と行為)するもの」とする。

2) 模擬患者と準模擬患者

本調査での模擬患者とは、医療場面のロールプレイにおいて、医療従事者以外の人を援助者役の学生を相手に患者役を演じる演者を指す。また、模擬患者は、演じる際の基礎的な内容について「一定の訓練を受けている」ことが前提であり、実際の患者と同じような症状や会話を再現できる

こと⁵⁾が特徴となる。加えて、ここでは「一定の訓練を受けている」模擬患者と区別できるよう、「一定の訓練を受けていない」患者役を準模擬患者と表現する。

3) ロールプレイ

一人の人間が他者の役割を演じるシミュレーション技法をロールプレイとする¹⁾。

4) フィードバック

フィードバックは、シミュレーション学習において、学生に自分が行った行動の結果を認識させるという重要な役割がある。模擬患者を用いた演習では、学生が実際行った援助と、それを受けた患者として客観的な立場で意見、感想を伝えることである¹⁾。模擬患者を活用した演習の構成上、ロールプレイ中その都度フィードバックを受けながら進めていく場合と、ロールプレイ終了後にまとめてフィードバックする場合とがある。構成上様々な方法はあるものの、模擬患者より受ける意見や感想をフィードバックと定義する。

2. 文献の選定

高齢者看護学の教授方法の一つである模擬患者を活用した演習の学習効果を明らかにするための文献の選定を行った。キーワードは、「模擬患者」「高齢者」「看護」とした。データベースは、医学中央雑誌 web 版と、国立情報学研究所が提供する論文データベース CiNii (国立情報学研究所論文情報ナビゲータ)を使用した。遡及可能な時期から2013年8月末の検索日までを検索対象期間とした。

さらに医学中央雑誌 web 版では、「原著論文」を条件に絞り該当した文献137件中、高齢者看護学の演習であること、医療者以外の人を患者役に用いていることを精選の条件とし、また患者役の背景による学習効果の特徴を検討するため、模擬患者の訓練の有無がはっきりしない研究論文を除いた。以上の観点より精選した8件と、CiNii から該当した7件から医学中央雑誌 web 版で選定した論文との重なりと会議録を除いた2件を選定し、計10件を対象とした。

3. 検討方法

検討方法は、演者の特性として模擬患者と準模擬患者に分類し、その演習内容、事例設定、演者

背景、演習構成と方法、演習の効果について整理した。その上でそれぞれの文献を比較検討して、共通点や特徴を抽出し、今後の演習プログラムへの示唆を得ることとした。

4. 倫理的配慮

著作権を侵害しないように文献の出典は明確に表記した。

II. 結果

対象とした文献 10 件の概要を表 1 に示した。発表の年次推移は、2001 年に始まり 2002 年までに 2 件、2007 年から 2013 年 8 月までに 8 件であった。10 件のうち模擬患者は 7 件、準模擬患者は 3 件であった。

1. 模擬患者を活用した演習

1) 概要

(1) 演習内容と事例設定

コミュニケーションを演習内容とする文献は 2 件^{6,7)}あり、グループホーム入所中の認知症高齢者の入所間もない帰宅欲求の発言の場面、入所 1 カ月ごろの食事を要求する場面、症状が進み外出予定時刻に姿を現さない場面の 3 場面設定していた。看護過程を踏む演習内容は 5 件⁸⁻¹²⁾であり、3 件は特別養護老人ホームに入所中の認知症高齢者の食後に食行動を欲求する場面¹⁰⁾、帰宅欲求を示す場面^{8,9)}、水分摂取を促すが拒否される場面⁸⁾であった。2 件は脳梗塞により片麻痺のある高齢者が独居生活への不安を示す場面¹¹⁾と、事例は不明であるが、看護過程の一連を同一模擬患者で展開する演習¹²⁾であった。

(2) 演者背景

模擬患者は、認知症の 3 件⁸⁻¹⁰⁾の事例と一連の看護過程を同一模擬患者で展開する事例¹²⁾がボランティア団体からの派遣であった。また所属はないが演習担当教員が作成した事例を再現できるように訓練を受けた人が脳梗塞の患者役¹¹⁾、日ごろからコミュニケーショントレーニングの患者役を演じている人が認知症高齢者とのコミュニケーション演習の模擬患者として協力⁷⁾していた。他 1 件は不明⁶⁾であった。

(3) 演習構成、方法

演習の方法は、学生グループの代表者が模擬患

者とロールプレイを体験し、ロールプレイ後、10 から 20 分間、または 1 単元時間を模擬患者からのフィードバックを受けて学生との意見交換をする演習構成⁶⁻¹²⁾であった。

2) 演習効果

(1) 演習の特徴より得られた効果

認知症を事例とした演習⁶⁻¹⁰⁾では、接したことのない認知症高齢者とのロールプレイを臨床の場であるかのようにリアルな体験として受け止めることができていた。また、その様子から認知症高齢者のイメージが付き、肯定的に捉えることができていた。

脳梗塞による片麻痺の障害を抱えたまま独居生活に戻る高齢患者の演習¹¹⁾では、事例患者の身体、心理、社会面の把握ができていた模擬患者とのロールプレイにより、高齢者と向き合い、やり直しのきかない看護を現実的に体験しつつ生きた人間のリアリティを受け止め、看護者としての専門的認識を形成する学習の場となった。

一連の看護過程を展開する演習¹²⁾では、同一の模擬患者が事例に対して必要な援助を理解しているため、それを考慮した継続的な演技が可能であった。また回を重ねて模擬患者と関わることで、患者の理解が深り個別性に合わせた看護を工夫、創造することが可能であった。

(2) コミュニケーションの工夫とフィードバックによる高齢者理解

コミュニケーション演習を目的とした認知症高齢者の事例^{6,7)}からは、模擬患者から、学生の不慣れな対応に対する意見や感想をフィードバックされ、人の気持ちが表れる非言語的コミュニケーションの意味について深く考えることができた。その考えから、対象者が納得できるような働きかけや対象者の話を理解することが、双方向的関係基盤となり信頼関係につながることを学べていた⁷⁾。

認知症高齢者の初期の中核症状を演じる模擬患者に対応する演習⁸⁻¹⁰⁾では、学生は、コミュニケーションに戸惑いながらも真剣な模擬患者に向き合い、学生自身が、対象への理解や行動を変化させることで、適切な対応ができることを学べていた。そして、学生自身の戸惑いを塚本^{9,10)}は「困難感」と表現し、学生はその困難感を乗り越え、認知症高齢者の正直な心情に敬意を持って近づく

表1 高齢者看護学における模擬患者または準模擬患者を活用した演習の概要

分類	筆頭著者 年	演習 内容	事例設定 ロールプレイ設定	演者背景	演習構成、方法		演習効果
模 擬 患 者	国武和子 ⁶⁾ 2002	コミュニケーション (認知症)	グループホーム入 所中の認知症高齢 者。 1 場面：入所間も ない時期、帰宅欲 求の発言をする 2 場面：入所1カ 月、昼食後に食事 を要求する 3 場面：症状が進 み、外出予定時刻 に姿を現さない	記載なし。	症状の進行段階の場面 を提示し、3場面のロ ールプレイを実施する。	全事例のロー ルプレイ後に 模擬患者から フィードバック を受ける。	認知症高齢者を肯定的にとらえることができ る。態度、言葉遣いは人生の先輩として接す ることができる。
	国武和子 ⁷⁾ 2001		日頃の活動は 主にコミュニ ケーションレ ーニングの 患者役を演じ ている。	1 事例 2 グ ループ終了 後模擬患者 からフィー ドバックを 受ける。	コミュニケーションのとり方の原理、患者の心 情について学習を深めることができる。模擬患 者から学生のケアに対する安心感や気遣いにつ いてのフィードバックを受けると学生の学習の 動機付けにつながる。学生の非言語的コミュニ ケーションを模擬患者がどのように受け止めた かをフィードバックから知ることができる。		
	塚本都子 ¹⁰⁾ 2009	看護過程 (認知症)	特別養護老人ホーム 入所中の認知症 高齢者が食後に食 行動の欲求を示す 場面	模擬患者ボ ランティア 団体。	事前に「対象の背景」「生 活習慣」「入所後の様子」 など事例の情報を得て、 対応方法を計画してい る。4人で20分間ロー ルプレイを実施する。	15分間模擬患 者からフィー ドバックを受 け演習の振り 返りをする。	自らの演習で生じた困難感の誘因や原因を内省 的に振り返る機会となり、さらに、模擬患者か らのフィードバックにより、認知症高齢者の世 界からコミュニケーションのあり方を見つめ直 することができる。また、認知症高齢者の世界に 歩み寄る喜びが、認知症高齢者ケアへの興味・ 関心を刺激する。
	塚本都子 ⁹⁾ 2008		特別養護老人ホーム 入所中の認知症 高齢者が帰宅欲求 を示す場面	模擬患者ボ ランティア 団体。			看護学生が認知症高齢者が体感している心情に 接近していくプロセスにおける内省的思考は、 敬意を持って認知症高齢者のこころを映し出 し、独自で寄り添う意味を探りあてる源になる。
	三澤久恵 ⁸⁾ 2007		特別養護老人ホーム 入所中の認知症 82歳女性。 場面1：帰宅欲求 を繰り返す 場面2：水を飲み まじょうと勧める がいらないと返 て飲まない	模擬患者ボ ランティア 団体。	4名グループの計画に 沿った看護実践のロー ルプレイを実施。2つ の看護場面について代 表2グループが模擬患 者と20分のロールプ レイを実施する。	ロールプレ イ後、20分 のフィード バックを受 ける。	ペーパーベシメントでは得られない臨床の場 をリアルに感じることができる。実感としての 体験を考えることにより、自己洞察へとつな がり、新しい発見を導き出せる。学生と模擬患者 の双方向のコミュニケーションとして、ケアす る者自身の行動や対象への理解を変化させるこ とにより、適切なケアができることを知る。
	古村英津代 ¹¹⁾ 2009	看護過程 (医療)	82歳男性。 脳梗塞で片麻痺が ありリハビリテ ーション期。独居生 活のため以前の生 活ができるのか不 安を持っている。	教員が作成 した事例に 沿って再現 できるように 訓練を受け た人。	看護過程の展開7回中、 展開後演習が3回。情 報収集～看護計画立案 をグループワークし、看護 計画を発表後、学生個々 が再度計画を立案する。 学生1人20分間のロー ルプレイを代表学生2 名が実施する。患者に対 して、退院後の生活への 思いを聴き支援する。	10分間の フィード バックを受 ける。	高齢者の認知・視力低下を理解するとともに高 齢者の身体的特徴の低下に対する非言語的コ ミュニケーションの方法や高齢者を尊重する姿 勢、高齢者へのコミュニケーションの配慮など を学習できる。高齢者と向き合い、やり直しの きかない看護を現実的に体験しつつ生きた人間 のリアリティを受け止め、看護者としての専門 的認識を形成する学習の場になる。
佐藤光栄 ¹²⁾ 2010	記載なし。		ボランティ アグループ の健康な 65～80歳 代。	看護過程演習5回中、 模擬患者は、情報収集、 不足情報の収集、看護 計画の実施(ケアの実 施)、報告会(フィード バック)の計4回に参加 する。学生4名1グ ループを10グループ作 成し、2グループ毎、模 擬患者1人を配置。	演習の最終 回の報告会 にて、模擬 患者と意見 交換をする。	同一の模擬患者で看護過程を展開することで、 個性のある看護計画や実践の学習ができた。 心理面では、回数を重ねて模擬患者と関わるこ とで、人となりが見え、理解できるようになっ た。模擬患者は、必要な援助を理解しているた め、学生が援助の工夫を考えられるように フィードバックすることができる。よって、学 生の創造性を育成することにつながる。	
準 模 擬 患 者	小泉由美 ¹³⁾ 2012	フィジカルアセスメント	記載なし。	A地区で月 1回開催さ れる「ふれ あいサロ ン」の企画 に参加した 高齢者ボラ ンティア58 名(男性7 名、女性51 名)、70～ 83歳。	1回目：老化現象の講義 2回目：フィ ジカルアセスメントの講義、問診内容、 バイタルサインの観察の説明の仕方を シナリオ化する 3回目：高齢者疑似体 験後、学生同士でフィジカルアセスマ ントを行い、シナリオの修正をする 4 回目：公民館にてフィジカルアセスマ ント演習を実施。学生と高齢者ボラ ンティアの1対1で40分間実施する。 聴取した内容は所定の用紙に記録する。 高齢者ボランティアより健康相談を受 けた場合は、教員が対応する。		高齢者と接することで、既存の知識と関連付け ながら加齢現象への理解が深まり、個性差は生 活史やライフスタイルの違いによる影響がある ことに気づく。また、衰えを補う知恵により 日々の生活で工夫を凝らしていることや、その ような生活の中には思いもよらぬ危険が潜んで いることに気づく。高齢者の反応を見ながら話 し方や言葉の使い方を工夫することをコミュニ ケーションをとる工夫ができた。コミュニ ケーションが発展し、配偶者や身近な人の死の体験 や自らの死を意識するようになったという高齢 者の語りから、老年期の発達課題である「死の 受容」に関する理解が深まる。
	金子真由美 ¹⁴⁾ 2011	コミュニケーション	70歳代女性。 左大腿骨頸部骨 折、骨粗鬆症。人 工関節置換術後4 日目の情報収集場 面。	一般高齢者。	術後4日目から受け持ち、患者が元の 生活に戻れるように介入する。実習初 日のコミュニケーションでの情報を収 集する場面をロールプレイする。全12 グループ中、2グループに1人の準模 擬患者を配置し、演習当日に教員が援 助者役の代表学生を決定し実施する。		ペーパーベシメントでは作り出せないコミュ ニケーション技術の学習ができ、自己中心的な 情報収集になってしまった等の学習課題が明確 になる。模擬患者からロールプレイ中にその都 度感じた気持ちを言葉や態度でフィード バックを得られるので、対象の気持ちの見解が得られ る。
	内田陽子 ¹⁵⁾ 2008	技術演習	要介護5の高齢者。 車椅子に座ること はできるが自分か ら動くことができ ない。5項目の技 術演習を実施す る。	地域で生活 する女性 65歳。	学内実習技術項目 ①おむつ交換、陰 部洗浄 ②座薬挿入と排便 ③口腔内 吸引 ④移乗 ⑤褥瘡療法 学生2 人が準模擬患者と、又は学生を対象に 技術を提供しながら説明を行い、教員 が必要に応じて補足説明、実践を行う。 ①②は患者役は黒のスバツを着用し、 介助者は援助の方法を口頭で説明しな がら実際には実施しない。⑤は患者役 の腹部に器具をあててもらい実施した。		老いのイメージを実像化しながら技術を学習で きる。また、演者から学生に直接、感想、意見 をもらえる事により、その学習効果は一層高ま る。

姿勢へと変化することができ、さらに模擬患者からのフィードバックにより認知症の高齢者の世界に近づき、内省的なコミュニケーションのあり方を思考し、共感的姿勢から認知症高齢者のケアへの抱負を学ぶことができる⁹⁾と述べている。

看護過程の実施段階で模擬患者を活用した演習¹¹⁾では、退院後の生活に不安を抱く脳梗塞の高齢患者に対し、その思いを聴き片麻痺でありながら独居生活を送るための支援について考える場面であった。そのロールプレイからは、高齢者の身体的機能低下による非言語的コミュニケーションの方法や高齢者を尊重する姿勢や配慮を学び、高齢者と親和的関係を築くための方法を意識化することができた。また、高齢者には独自の生き方があることを理解できていた。

同一の模擬患者に対して一連の看護過程を展開する演習¹²⁾では、看護過程展開の情報収集、不足情報収集、看護計画の実施、報告会（フィードバック）の計4回と重ねて同一模擬患者と関わることで、その患者の思いを知り患者像が膨らむことで、人となりをつまえることができるようになった。

2. 準模擬患者を活用した演習

1) 概要

(1) 演習内容と事例設定

準模擬患者を活用した3件は、事例設定が不明なフィジカルアセスメントの演習¹³⁾と、70歳代女性が左大腿骨頸部骨折で人工骨頭置換術を受け術後4日目の情報収集をするコミュニケーション演習¹⁴⁾と、車椅子に座ることができるが自ら動くことができない要介護5の高齢者への援助技術を5項目実施する演習¹⁵⁾であった。

(2) 演者背景

フィジカルアセスメント演習¹³⁾での準模擬患者は、地域で催し物に参加する高齢者がボランティアとして58名（70～83歳の男性7名、女性51名）が協力していた。人工骨頭置換術後の高齢者¹⁴⁾と要介護5の高齢者¹⁵⁾は、特定の団体に所属していない一般の高齢者が演じていた。

(3) 演習構成、方法

フィジカルアセスメント演習¹³⁾では、地域での催し物に参加する高齢者ボランティア58名の協力を得て、全学生が1対1でロールプレイする

ことができ、バイタルサイン測定と他の観察、問診を40分間実施する演習が報告された。ロールプレイでは事例設定はなく、参加した高齢者ボランティア自身のフィジカルアセスメントの実施となっていた。中には健康相談を受ける場面もあり、教員がその対応に応じる構成となっていた。

コミュニケーション演習¹⁴⁾と技術演習¹⁵⁾では、代表学生がロールプレイする演習であった。演習構成は、ロールプレイ中の模擬患者の反応や意見をフィードバックとして捉えて演習をすすめていた。

2) 演習効果

(1) 演習の特徴より得られた効果

準模擬患者の演習^{13, 14)}では、実年齢が高齢期である人を起用することで高齢者の加齢変化の実態をリアルに感じ取る効果があり、高齢者を尊敬する存在として捉えると同時に学生がエンパワーメントされる機会となった。それは、高齢者の身体的特徴を既存の知識と関連づけながらその実態を確かめ理解がより深まり、身体的特徴はその人の生活史やライフスタイルの違いにより個別差が他の年齢層より大きいことを実感していた。また、加齢変化を補う知恵により生活を工夫している一方、思いもよらぬ危険が潜み、安全な生活を保障する支援が必要であることに気付いた。さらにコミュニケーションが発展すると、戦争体験を語る高齢者から、歩んできた背景や経験から得た価値観を次世代に伝承される貴重なものであると捉えることができた。そして、身近な人の死や自己の死についての語りから、老年期の発達課題でもある「死の受容」に関して、学生は実感をもって理解していた¹³⁾。

(2) コミュニケーションの工夫とフィードバックによる高齢者理解

一般高齢者が演じる準模擬患者の情報収集段階におけるコミュニケーションの演習¹⁴⁾では、学生は得たい情報を得ることができない体験を通して、自己中心的に情報を得ようとしている傾向に気づいた。そして、コミュニケーション演習のロールプレイの過程において、準模擬患者がその時に感じた気持ちを言葉や態度でフィードバックするため、相手の気持ちを予測や想像で終わらず、一つの見解を得ることができた。

要介護5の高齢者演じる準模擬患者を対象に看護技術を提供する演習¹⁵⁾では、ロールプレイ中、

その都度フィードバックを受けることで、高齢者のイメージを実像化しながら看護技術を実践することができた。

Ⅲ. 考察

1. 演者の特性を生かした多様な演習内容

コミュニケーション演習、フィジカルアセスメント演習、技術演習、看護過程展開演習、疾患を持った高齢者事例、認知症高齢者事例など様々な演習内容においても、リアルな臨床場面を再現できていた。模擬患者が本物の患者のように振る舞い、自由度の高い演技ができる状況は、高齢者看護のシミュレーション学習の1つ¹⁶⁾として活用性は広い。高齢患者の特色ある様々な場面設定であっても、模擬患者を活用した演習は基礎的な学習を得る有用な方法と言える。このリアルな状況の再現は、既存の知識からさらに実感を得た理解に変化し、学生は高齢者のイメージがより深まることになる。

現在、看護学教育で活用されている模擬患者の種類は、標準模擬患者 (standardized patient) と一般模擬患者 (simulated patient) である。一定のレベルで標準化され、学生に対して公平かつ公正に対応する標準模擬患者は OSCE に活用される¹⁷⁾のに対し、高齢者看護学では一般模擬患者が主流であった。一般模擬患者は、簡単なシナリオによる自由度のある演技ができ、数名で同じ設定を演じる事例であっても他の模擬患者と演技を厳密に合わせる必要はなく、また学生の演習へのフィードバックはするが演習内容の評価はしない、といった特徴がある¹⁷⁾。高齢者の特性や個性を学習する目的には、一般模擬患者を用いることが適していると考えられる。

そして、演者の背景は、高齢者を理解することを演習目的の一つにしていることが多く、演者の実年齢が高齢期であることが特徴であった。このことは、高齢者を理解する学習効果があった。高齢者との関わりの少ない看護学生は、実習において高齢者とのコミュニケーションを難しく感じており、看護学生が高齢者の現実の姿に適合するコミュニケーション技術を獲得するための教育方法の工夫が迫られている¹⁶⁾。その工夫の一つとして高齢期にある模擬患者を活用した演習は、コミュニケーション技術の獲得に有用であると言える。

それは、人である模擬患者を相手に実施する演習であることから、どのような演習内容であっても看護の基本となるコミュニケーション技術の実践は必須である。高齢者とのコミュニケーションを体験することで、視聴覚に関連した加齢変化や認知機能の低下を実感するとともに、その対応の難しさの理解につながる⁷⁻¹⁴⁾ことは明らかであった。そして、コミュニケーションが発展することで、その人の心情や生きてきた生活史、身近な人の死の体験の語りより、老年期における発達課題である「死の受容」に触れることができる¹³⁾。また、高齢者を援助する者として、高齢者の尊厳を意識する姿勢について自己洞察する機会となっている^{8-11, 13)}。高齢者の身体的加齢変化に関連したコミュニケーションの工夫を考え実施する演習や、その人個人の体験を語ることで老年期の発達課題を実感できることを目的とするなら、準模擬患者であっても実年齢が高齢期であることでその効果は期待できる。そして、模擬患者を活用した演習では、代表学生のみが模擬患者とロールプレイをすることが構成上の限界であるが、大勢の一般高齢者の協力を得られる状況であれば、準模擬患者としてその学習目的は達成できると考える。

模擬患者は、設定された事例をリアルに「演技」することと、学生から受けた対応や援助に対する感想や意見を「フィードバック」する役割を担うために、一定の訓練を受けている。「演技」の点では、自分とは違う人生を送っている患者を演じるため、病気や症状、治療における身体、精神的苦痛、それらを含めた患者の考え方、心配や不安、家族や仕事などの社会的背景を演技の中で学生へ伝えること¹⁸⁾が求められている。また、「フィードバック」は、ロールプレイで見ているだけでは分からない患者の心の動きについて学生に伝える役割がある。そしてこの心の動きを伝えることで、学生が自己の対応について内省できることが模擬患者の最大なる目標になる。それには、ロールプレイ中の患者の感情がどのような事実で動いたかを思い起こす能力が必要となる¹⁸⁾。これらの模擬患者の役割から考えると、高齢者看護学の演習においては、初期段階の認知症高齢者の世界を表現したり、ある疾患の高齢患者の一連の看護過程の展開では同じ事例を数回演じたり、機能障害を持った生活を営むことへの不安をその人の社会

背景も含めて表現することが求められる。そして、ロールプレイで受けた援助に対するフィードバックのために、患者役として受けた心の動きを看護実践者としての学生が振り返り内省できるような感想や意見を伝えるには、訓練を受けた模擬患者こそが担える演習内容であると考えられる。

2. 認知症高齢者事例演習の可能性

認知症のケアは、認知症の人たち自身の声に耳を傾けきめ細やかに心を配りながら寄り添い、認知症の人“その人”の視点に立ち共感を持って理解しようとする姿勢そのものが重要である¹⁹⁾。そして、認知症高齢者の言動の理解にはその人が持つ本質や人間性を看護師自身が実感することが重要である²⁰⁾とされている。しかし、臨床の看護師であっても認知症の特異的行動に衝撃を受け混乱し、嫌悪や恐怖、苛立ちといった感情を持つ^{21, 22)}ため、認知症高齢者と関わりのない学生にとっては、認知症のケアに対して驚きや困惑といった否定的な感情を持ち対応が困難であると感じる²³⁾ことは、当然のようである。

このように、認知症高齢者に対する否定的な認識を持つ学生が、認知症のケアの基本について学ぶ学習方法として、模擬患者を活用した演習は有用であると考えられる。それは、症状の表現が難しい認知症高齢者をリアルに演じることができることが理由の一つとなる。また、認知症高齢者とのコミュニケーションのとり方の原理や患者の心情の学習が深められ、学生のケアに対する安心感や気遣いについてのフィードバックが学習の動機付けになる⁷⁾成果や、模擬患者が演じる認知症高齢者の世界に歩み寄ることの大切さを喜びとして感じることができる¹⁰⁾成果が得られたからである。よって、認知症高齢模擬患者を活用した演習は、ロールプレイで模擬患者が受けた感情をフィードバックで知ることができ、学生が自己洞察する機会を得られることになる。認知症高齢者はコミュニケーションの疎通が難しく、率直な心情を伝えることが困難である。患者の立場に近い人から、援助を受けるものとして直接本心を伝えてもらえる、数少ない機会になりうる²⁴⁾のではないかと考える。実習前に臨床の場では得ることのできない体験をすることで、認知症高齢者の世界に寄り添おうとする姿勢やその世界を想像しようとする

力を育めるのではないかと考察する。

3. 模擬患者の活用における課題

本調査では、訓練を受けていない一般高齢者が準模擬患者として参加した演習においても学習効果があることが分かった。演者が高齢者であれば、個別差はあるものの外見上の変装は不要であり、コミュニケーションに関連した諸機能の低下も自然体のままで十分高齢者のリアリティは表現できる。演者が高齢者であるだけでも、学生は高齢者の理解が深まることが確認できた。しかし、OSCEの活用の広がりとともに、一般模擬患者を用いた演習も普及しつつある¹⁸⁾経過の中で、模擬患者の定義上、一定の訓練を受けた演者を模擬患者と称するところ、訓練を受けていない患者役も「模擬患者」と表現している文献があった。一定の訓練を受けたものを模擬患者として活用することが教育効果を高める上で重要である¹⁸⁾ため、模擬患者の定義を厳守した表現が求められるとともに、加齢による身体的機能低下やコミュニケーション方法の特徴を実感として学生が理解するためにも、高齢期演者の実年齢も学習効果を上げる要素として考慮する必要があると考える。

IV. 結論

高齢者看護学における模擬患者または準模擬患者を活用した演習の効果について10件の文献を検討した結果、どちらもリアリティのある演習ができることと、高齢者の現実の姿に適合するコミュニケーション技術を獲得するための教育方法になるという点に加え、以下の2点の示唆が得られた。

1. 模擬患者の演習は、症状の表現が難しい認知症事例や、障害をもち生活の不安を抱えた患者を社会背景も含めて演じる事例、継続した患者の過程を再現できる一連の看護過程演習の実施が可能である。これらの事例より、認知症高齢者の世界に寄り添おうとする姿勢を育むことができ、対象を理解する力と個別の援助について考え実施することができる。そして、模擬患者が疾患を理解し患者の背景も含めた演技ができること、学生の学習を深める効果的なフィード

バックができるように訓練を受けているという特性を活かすことが重要である。

2. 準模擬患者の演習は、演者の実年齢が高齢期であれば演者自身の体験談を語ることで、高齢者の身体的機能低下や「死の受容」の発達課題など、高齢者の特徴を理解することができる。この場合、大勢の演者を準備することで全学生のロールプレイの実施も可能であり、その人の生き方による個人差があることへの理解が深まる。

今後の高齢者看護学における模擬患者または準模擬患者を活用した演習の課題は、模擬患者の演習が普及しつつある経過の中、模擬患者の定義を厳守するとともに、演者の実年齢も学習効果を上げる要素として考慮することである。

引用文献

- 1) Rheba de Tornay, Martha A.Thompson. (中西睦子・荒川唱子訳)：看護学教育のストラテジー，医学書院，東京，25-58，1993.
- 2) 中村恵子：第I章看護教育におけるOSCE 2 OSCEの概要，中村恵子編著，看護OSCE，メヂカルフレンド社，東京，5-8，2011.
- 3) 本田多美枝，上村朋子：看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察——教育の特徴および効果，課題に着目して——，日本赤十字九州国際看護大学IRR，(7)，67-77，2009.
- 4) 小川妙子，工藤綾子：老年看護学におけるシミュレーションに関する教育研究の分析——研究の現状と教育効果——，順天堂医療短期大学紀要，14，34-43，2003.
- 5) 藤崎和彦：アメリカ医学教育における模擬患者の導入の現状とその理論，看護展望，18 (8)，44-48，1993.
- 6) 国武和子，古川秀敏，野口房子：模擬患者参加の痴呆高齢者のコミュニケーショントレーニングにおけるグループワークの効果，県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要，3，17-26，2002.
- 7) 国武和子，古川秀俊，野口房子：模擬患者を利用した老年性痴呆患者の看護における学生の反応と学習過程，県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要，2，23-34，2001.
- 8) 三澤久恵，中澤明美，佐野望：模擬患者参加による認知症高齢者演習の学習効果——学生の受け止めの分析から——，共立女子短期大学看護学科紀要，(2)，69-80，2007.
- 9) 塚本都子，三澤久恵，中澤明美，他：認知症高齢者の意思を尊重した看護学生の共感プロセス——模擬患者 (Simulated Patient) 参加型演習の分析から——，第39回老年看護，279-281，2008.
- 10) 塚本都子：認知症高齢模擬患者の参加型演習における教育効果——コミュニケーションに焦点をあてた分析から——，第40回老年看護，147-149，2009.
- 11) 古村美津代，木室知子，中島洋子：老年看護学教育における模擬患者導入の臨地実習への影響，老年看護学，13 (2)，80-86，2009.
- 12) 佐藤光栄，平栗智美：高齢者患者の看護過程に模擬患者を活用した学習効果——授業後のアンケートの分析から——，湘南短期大学紀要，(21)，85-87，2010.
- 13) 小泉由美，高山直子，橋本智江：学生が地域の高齢者ボランティアと1対1でフィジカルアセスメントを実施する演習体験を通しての学びの分析，老年看護学，16 (2)，57-64，2012.
- 14) 金子真由美，橋本笑子：老年期の健康障害のある対象の看護過程演習の取り組み——模擬患者導入による学生の学びの実態——，中国四国地区国立病院附属看護学校紀要，7，64-77，2011.
- 15) 内田陽子：学内実習における高齢者アクターを導入することの学習効果，日本看護学教育学会誌，17 (3)，37-44，2008.
- 16) 清水裕子，野尻雅美：模擬患者を活用した学生用老年者コミュニケーション教育プログラムの特性，ヒューマンケア，6，45-54，2005.
- 17) 阿部恵子：第II部模擬患者のてびき 第4章模擬患者とは？，鈴木富雄，阿部恵子編，よくわかる医療面接と模擬患者，名古屋大学出版会，名古屋，38-44，2011.
- 18) 前田純子：よりよき医療コミュニケーションを求めて——模擬患者を通して見えてきたもの——，ライフサイエンス出版，東京，1-21，2011.
- 19) 水谷信子：I 認知症と看護 2. 認知症ケアの理解，中島紀恵子編，新版認知症の人々の看護，医歯薬出版株式会社，東京，2-5，2013.
- 20) 湯浅美千代，小野幸子，野口美和子：老人痴呆者の問題行動に対処する方法，千葉大学看護学部紀要，(23)，39-45，2001.
- 21) 長畑多代，松田千登勢，小野幸子：介護老人保健施設で働く看護師の痴呆症状に対するとらえ方と対応，老年看護学，8 (1)，39-49，2003.
- 22) 長畑多代，松田千登勢，佐瀬美恵子，他：介護老人保健施設で働く看護師の痴呆性高齢者とその言動に対するとらえ方，大阪府立看護大学紀要，8 (1)，19-27，2002.
- 23) 西村美里，大町弥生，中山由美：認知症高齢者に看護学生が抱いた感情，藍野学院紀要，22，12-21，2008.
- 24) 大滝純司：日本の看護教育への模擬患者導入の意義，看護展望，18 (8)，49-51，1993.